

交通 評論



「この道はいつか来た道と歌っています」と大学の同級生のメールにあった。12月6日に「特定秘密保護法案」が多くの疑問を残して、ほとんど審議されないまま、与党の数の押し切られて国会を通過した。国民の知る権利は今後大幅に侵害されるのではないかと恐れている。

気象庁OB・OGの機関誌「きしよ春秋」(12月号)に載った元気象研究所予報研究部第一研究室長の増田善信氏の記事「秘密保護法で天気予報がなくなる」を読んで今さらながら戦時中の恐怖を思った。1941年(昭和16年)12月8日、京都府北部の宮津測候所の職員だった増田

氏は突然暗号化された気象放送に驚かされた。以後、気象データに関係者以外の人に伝えることは処罰の対象になった。小さな漁港で、漁船に出漁前に知らせていた天気予報も禁止になり、台風襲来や豪雨の予想も知らせることができなくなった。

42年8月27日、28日の猛烈な台風では、死者891人、不明267人、多数の家屋が全壊したが、特例で警報が出されたのは27日12時で、陸海軍の了解を得てラジオ放送を行ったときは既に遅かったとのことである。しかも特例で警報が出されたのはこの1回かぎりで、あとは44年9月15日、18日の台風や、同年12月7日の志摩半島の南を震源とするマグニチュード7・9の地震、それによって引き起こされた津波も、その1カ月後の三河湾を震源とするマグニチュード6・8の地震も全く知らせられなかった。地震が起こったときえ口外禁止だったとのことである。

多くの学徒動員の学生や

いつか来た道

土器屋 由紀子

るマグニチュード7・9の地震、それによって引き起こされた津波も、その1カ月後の三河湾を震源とするマグニチュード6・8の地震も全く知らせられなかった。地震が起こったときえ口外禁止だったとのことである。

このような非人間的な狂気に満ちた事態は「あの戦争中」だったからで、今はそんなことはあり得ないと思っていた。ところが、増田さんの記事

の中の「1990年の湾岸戦争の時もイラク周辺の国々は一斉に気象管制を始め

7人、多数の家屋が全壊したが、特例で警報が出されたのは27日12時で、陸海軍の了解を得てラジオ放送を行ったときは既に遅かったとのことである。しかも特例で警報が出されたのはこの1回かぎりで、あとは44年9月15日、18日の台風や、同年12月7日の志摩半島の南を震源とするマグニチュード7・9の地震、それによって引き起こされた津波も、その1カ月後の三河湾を震源とするマグニチュード6・8の地震も全く知らせられなかった。地震が起こったときえ口外禁止だったとのことである。

集団疎開の子どもたちに被害が出て、圧死した小学生もいたが親に伝えられなかったとのこと、飛行機工場などが壊滅したことが明らかになり戦意が落ちること

を恐れたためと増田さんは推測している。当時はそれに反論することは命懸けだったし、自分だけでなく家族の安全も保証できない時代だったことは、終戦時に国民学校1年生だった私にもおぼろげな記憶がある。

たため、イラク周辺の国々からの気象電報が入電しなくなり、その結果アラビア半島付近は空白の天気図になってしまった」ことを読んで愕然(がくぜん)とした。決して昔の話ではなく「衛星データがネットですぐでも入手できる」今の私たちの環境も、決して安心

してられないのではないだろうか。戦後68年の平和に慣れてしまった私たちは、経済大国の一つに連なり「戦争のない」長寿社会を享受している。しかし、経済さえうまく回っていればよいという価値観を持ち、政治家の悪口を言いながらも実質的には任せきりである。その結果、とうとうフクシマの原発事故という最悪の事態を迎えてしまった。その上、またもう一つ取り返しのつかない一歩を踏み出すことを許してしまったのではないだろうか。72年前に悪夢に向かつて踏み出した12月8日の開戦の日に近い、今年の12月6日に通過したこの法案が、子どもや孫たちの世代を「いつか来た道」へ連れて行ってしまふことを強く恐れている。(江戸川大学名誉教授)